れ蜜といひて上品なり、漢名生蜜、一法槽に入れて火を以て焚き、て取なり、但し火氣の文武毫厘の間を候こと大事あり、又脾を取り潰し、蜂の子ともに研水を入れ、煎じて絞り採を絞りといふ、漢名熟蜜凡蜜に定る色なし、皆方角の花の性によりて數色に變ず、

〔重修本草綱目啓蒙二十七蟲〕蜂蜜

凡ソ蜂房ノ中ニ貯ル蜜ハ、皆蜂ノ食物ナリ、春暖ノ時ヨリ花蘂ヲ採リ、房中ニ釀シ置テ、冬月ノ貯トス、京師ニテハ紀州熊野蜜ヲ上品トス、此レニ山蜜家蜜ノ二品アリ、〇中略藝州廣島ノ山代、石州、筑前、土州、薩州、豫州、豊後、丹波、丹後、但州、雲州、勢州、尾州等ノ諸國ヨリモ出レドモ、藥舗ニテハ皆熊野蜜ト呼ブ、

〔續日本紀二十淳仁〕天平寶字四年四月丁亥、仁正皇太后〇桓武后原光明子藤遣使於五大寺、每寺施雜藥二櫃蜜缶一口、以皇太后寢膳乖和也、

〔延喜式十五內藏〕諸國年料供進

蜜蘇諸國所進

蜜甲斐國一升、相模國一升、信濃國二升、能登國一升五合、越中國一升五合、備中國一升、備後國二升、

〔延喜式三十七典藥〕蒲月御藥

犀角丸六劑、〇中略所須犀角一斤三兩二分、〇中略蜜小二斗五升七合、〇下略

〔薫集類抄上〕侍從

朱雀院東三條院用之

沈四兩　丁子二兩　甲香一兩　甘松一分三朱　麝筋一分三朱已上小

右方自天曆御時所令傳給也、取煎蜜微火以春篩、占唐入蜜、且煎且攪、撥合之後、入諸搗香、以匙調和、先以目算計搗香程、調占唐之蜜、蜜程多於香、少尤爲拙、以能均成、爲巧合了、